

中村中学校・高等学校

一人ひとりの生徒にきめ細かく対応 5つのチカラを身につけ 機に応じて活動できる女性に

NQフェスタでメモをとりながら
発表を聴く生徒たち

113年の歴史を持つ中村中学校・高等学校は、清く、直く、明るくの校訓のもと、生徒が自ら伸びる教育を実践している。これからの時代に必要となる5つのチカラを掲げ、さまざまな取り組みを進めている同校。今回はその中の表現力・発信力の伸長を中心に、江藤健教頭にお話をうかがった。

生きるために必要な 非認知型智力を育成

「世の中が急速に変化し、正解のない問いにいかに向き合っていくかが問われている今は、いわゆる『学力』だけを身につければいいという時代ではありません。本校では従来の『認知型学力』に加え、社会で生きていくうえで必要な力を『非認知型智力』と位置づけ、さまざまな取り組みを実践しています」。江藤教頭は、同校の教育の特徴をこう語る。

具体的な非認知型智力として、同校が成長目標に掲げているのが「地球規模で考え、足元から行動するチカラ」「人と上手な関係を構築するチカラ」「思考・判断して文字化するチカラ」「考えて行動するチカラ」「自らサイクルを回し続けるチカラ」の5つ。この5つのチカラを身につけることで、建学の精神である「機に応じて活動できる女性の育成」の実現をめざしている。

例えば「思考・判断して文字化するチカラ」を育むため、書く・人前で話す機会を多く設けている。さまざまな教科でレポートや発表を課しており、年間に20回×5年間で「100本表現」と呼んでいる。「実際はその倍近いですね。人前で話すのが苦手という生徒も、少人数のグループなら話しやすい。そうして少しずつ話すことに慣れていけば、クラス、学年、全校と規模が大きくなって物おじせず話せるようになります」

書く方でも、課題や提出物を多く課すとともに、中学での読書ノート、年1回の読書感想文コンクールなど読みっぱなしではなく文字化する機会を多く設けている。

「生徒たちの提出物に、毎回丁寧にフィードバックを行っている教員が多いです。小規模校だからこそ一人ひとりの生徒と向き合う教育が実践できています」

企業とのPBL学習に取り組み 2チームが全国大会出場

また、同校が力を入れている取り組みに探究学習がある。同校では自ら問いを立て、解決し、さらに新たな問いを立て……というサイクルを回す活動を「探究」ととらえて実践。今年度からは「NQ（中村クエストの略）フェスタ」として全校挙げての探究活動とその発表の場を設けている。中1はSDGs研究、中2は企業研究、中3は職業研究をテーマに研究を進めていく。高1では企業からミッションを与えられ、アイデアを出しあいながら課題解決に挑む。高2では生徒一人ひとりがテーマを設定し、1年かけて探究内容を深め、最終的に個人でのポスターセッションへとつな



教頭
江藤 健 先生



地元企業と開発したオーガニック化粧水と生徒のイラストが入った竹紙ファイルが清澄祭で売られた

げていくという。

「これまでも本校は『トビタテ!留学JAPAN』^{※1}などで結果を出してきましたが、NQフェスタでは“調べて終わり”ではなく、より掘り下げ、深化した探究をめざしています。2021年度から参加したクエストカップ^{※2}では、いきなり高1の2チームが全国大会出場権を獲得、これまで本校が取り組んできた表現力・発信力が評価されたと自負しています。今後は先輩たち発表を見ることで、下級生たちも高いモチベーションで探究活動に取り組むような流れを作っていきたい。そして、体育祭・文化祭に並ぶ本校のイベントとして、このNQフェスタをグレードアップしていきたいですね」

中村中学校・高等学校

TEL.03-3642-8041
www.nakamura.ed.jp/



※1 トビタテ!留学JAPAN:文部科学省が2014年からスタートさせた海外留学支援制度。同校は6年連続日本代表に選ばれている。

※2 クエストカップ:全国36都道府県、320校で約6万1000人の中高生が取り組む探究学習プログラム「クエストエデュケーション」の発表の場。